

情勢報告

21 園芸年度の締めくくり、試験展示圃成績発表会



ナス篤農家の技術を解説

J A土佐あき園芸研究会の平成21園芸年度活動の締めくくりとして、6月30日に約80人の農家や関係者が参加して、「試験展示圃成績発表会及び講演会」が開催された。

成績発表では、土着天敵を利用したIPM技術の実証など最先端の成果について農家が発表した。また、振興センターからは「ナスの18tどりを目指した農家の経営・技術の普及」として、各地区で調査した篤農家技術の特徴等について解説した。試験を担当した農家から直接話を聞けるとあって、参加した農家からは熱心な質問が出された。

ほかにも、畜産農家代表による家畜ふん堆肥のPRや振興センターからの「ナス経営を考える」講習、卸売市場担当者からの「消費流通の変化と産地への提言」と、盛りだくさんの内容であった。このあと各地区で反省会が開催されて、今回の内容が多くくの農家に伝達される予定である。

安芸管内土着天敵温存ハウス設置グループ意見交換会



7月7日に安芸管内土着天敵温存ハウス設置グループの農家25名が集まり、生産技術の向上を目的に検討会が開催された。

現在、管内のグループは、H20年12グループからH21年には芸西村や東洋町にも拡大し16グループとなっている。

交流会は、温存ハウスの現地視察や農業技術センターから土着天敵の特徴などについての講演の後、各グループから取り組み内容やタバコカスミカメと市販天敵の関係など体験に基づく意見の交換を行った。

参加者からは、いろいろな意見が聞け参考となったとの声が聞かれ、今後とも、このような交流会を開催し、技術の向上と取り組みの拡大に向け支援をしていく。

J A土佐あき吉良川支所芋部会の取り組みについて



プロジェクトチーム会



コガネムシ用フェロモントラップを共同で組み立てているところ

7月9日、J A吉良川出荷場において芋部会が開催された。そのなかで、地域アクションプラン「西山きんとき販売促進事業」の取り組みについて、生産者8名と関係者（実行支援チーム）で話し合いを行った。振興センターからは加工品開発班の編成を提案した。農家からも手取り単価向上のために、規格外品の加工への取り組みは不可欠であるとの意見も出され、結果、部長やキラメッセ担当者を含めた5名で試作や販売等の活動計画を、年末をめどに作成することを確認した。

また、7月14日にハスモンヨトウとコガネムシ類のフェロモントラップを生産農家が共同で作製し、一斉に設置を行った。振興センターが3日後に調査したところ、ドウガネブイブイやセマダラコガネなどのコガネムシ類が1トラップ平均20頭程度捕獲された。今後は、予察を継続実施し、その結果を掲示することにより、適宜防除につなげる。

JA 京都網野支店ユリ部会との産地交流会



収穫中のハウス内でかん水時期や量について議論する。

7月11日にJA土佐あき花卉部球根部会(福田昌二部長、11名)が京丹後市網野町を訪ね冬季産地である安芸市と新興の夏季産地である網野町(部会員18名)とおもに栽培技術について産地間交流を行った。午後半日をかけて、3班にわかれての現地視察の後、ホテルで会議を開き、安芸側からは、視察の結果を踏まえ、栽培技術は以前に比べ格段に向上している旨やさらに収穫期を迎えた今後の栽培管理方法の意見がほぼ全員から発言された。また、花き市場および球根会社からは販売情勢や球根取扱情勢、ユリ切り花の品質と産地の生き残り策など多彩な話題で盛り上がった。網野町側からはご指導いただいたおかげで栽培技術も向上し、品質もよくなってきているのでさらに上をめざすという誓いの言葉があった。

季節的に異なる産地の交流であったが、栽培技術の向上という点では共通しており、また網野町地域独特の収穫道具に興味を示すなど、皆何らかの成果を得た産地交流会であった。

イチジクで地域の活性化を



チーム会で検討中

7月14日、奈半利町で地域アクションプラン(特産品「イチジク」による地域の活性化)の取り組みの一環として、実行支援チームの3回目の会を開催した。地域の活性化が目的。イチジク栽培農家をはじめ、JA、町職員等9人が出席し、地域アクションプランの進捗状況及び栽培の推進について検討した。イチジク栽培農家を増やすことが現在の大きな課題であり、8月に配布する町民向けの「イチジク栽培しませんか」チラシの内容と栽培説明会(2回)の日程・方法を決定した。

今後もチーム会の開催と現地での実証により、奈半利町の地域活性化につなげる。

北川村ゆず地域座談会スタート



7月22日より、北川村ゆず地域座談会が北川村北部集会所からスタートしました(全6地区で開催)。役場からは、前年度の取り組み結果や質問への回答を、JAからは、本年度のスローガン「集荷目標1300t」と「選ばれる産地づくり」、そして「新設搾汁施設」の説明が行われました。また、農業振興センターからは「集落営農について」や「韓国ユズの動向」について情報提供を行った。

意見交換では、貯蔵ユズの取り組みや、北川の実生ユズの販売促進や韓国ユズの動きに対しての産地として取るべき行動等が議論された。